



令和4年 10月 26日

**建築文化週間 学生グランプリ 2022「銀茶会の茶席」で
広島大学 3 チームが最優秀賞などトリプル受賞****情報提供**

東京・銀座通りで催す茶会「銀茶会※」で展示・使用される創作茶席の設計・制作案を募集した日本建築学会主催の建築設計競技「建築文化週間 学生グランプリ 2022『銀茶会の茶席』」に、広島大学大学院先進理工系科学研究科建築学プログラム建築設計学研究室から応募した3チームの作品が、2次にわたる審査を経て全国47作品の中から最優秀賞、入選、審査員賞にそれぞれ選ばれました。

最優秀賞を受賞した作品「秋の木」は広島県産材の杉板を使用。反物に見立てた板を連ねて麻紐で縫い合わせる簡素な構造ながら、TPOに応じて扇子や円錐、螺旋など多様な形に変化させることができます。原寸大の実物が10月27日から31日まで東京・銀座の銀座三越9階の銀座テラス・テラスコートに設営・展示され、30日には茶席を使って表千家のお茶会が開催されます。

同建築設計競技では、まず1次審査で入選した作品は全銀座会催事委員会および日本建築学会建築文化事業委員会による指導の下1/1模型を製作。このうち最優秀賞を受賞した作品は銀座三越での展示・使用を目的とした実施設計と制作を行います。設計課題のように講評を受けるだけにとどまらず、実際に建築物を設計・制作することで建築のおもしろさ、難しさを経験できることが、他の建築設計競技と大きく異なる特徴です。

入賞作品は以下のとおりです。

・入賞作品

最優秀賞…「秋の木」 大学院先進理工系科学研究科 山下正太郎ほか3人

入選…「縫雲庵」 大学院先進理工系科学研究科 山本千結ほか2人

審査員賞…「移ろい誘う秋模様」 大学院先進理工系科学研究科 嶋田駿斗ほか3人

※「銀茶会」は、年に一度、銀座通りの周辺にお茶席を設けて行われる野点大茶会である。当日は、表千家、裏千家、武者小路千家、江戸千家、遠州流茶道、煎茶道の六流派のお茶席や点茶を体験することができ、2022年で20回を迎える。2009年から、銀座三越の会場にて学生の設計・制作による学生創作茶席を展示・使用している。

【お問い合わせ先】

大学院先進理工系科学研究科建築学プログラム 准教授 中蘭哲也

Tel : 082-424-7834

E-mail : tnkzn@hiroshima-u.ac.jp

発信枚数 : A4版 4枚 (本票含む)

秋の木

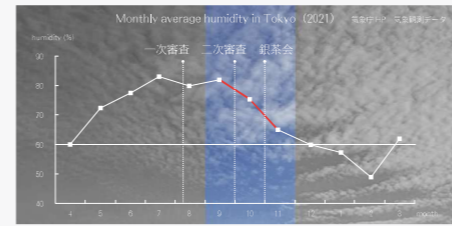


我々が生活している中で自然の美しさを感じるものとは一体どういうものだろうか。豊かさと飽和した社会では生活の周りにあるものは手を加えられ、本来の姿から遠のいたものになってしまっている。

自然の不規則さをもつ美しさを見失った現代で、ありのままの姿の魅力をもう一度見直す必要があるのではないだろうか。

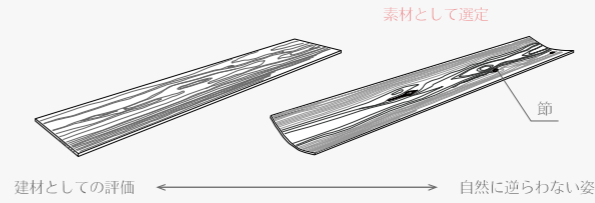
01 THEME 秋の空

湿度変化によりあらわれる美



秋の澄んだ青い空の発生には空気中の水分量が関わっており、湿度変化は重要な要素である。秋に向かって湿度が変化していくなかで、隠れていた美しさが湿度変化により表出するような空間を考える。

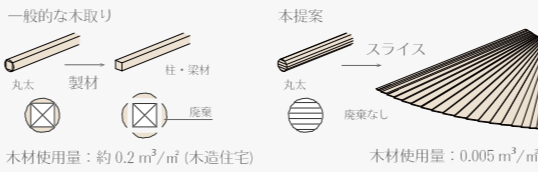
木材の“反り”



秋になり乾燥した大気では木材には反りが発生する。一般的に、反りは嫌われるものだが、木材を反ったまま使用し、木のありのままの姿を受け入れることがわびさびの精神といえるのではないだろうか。そこで秋へ向かい命が吹き込まれ、茶会を待ちわびるような茶室を提案する。

02 CONCEPT 自然なまま活かす

丸太を無駄なく使う



丸太を製材する際に一般的な木取りでは円形の断面から角材を取り出すため、端部が無駄になってしまう。そこで断面を厚さ数ミリでスライスすることで木材を無駄なく使いきる。その厚さ数mmに構造から仕上げまでが収められ、木造住宅の1/40の木材で大きな空間を構成できる。

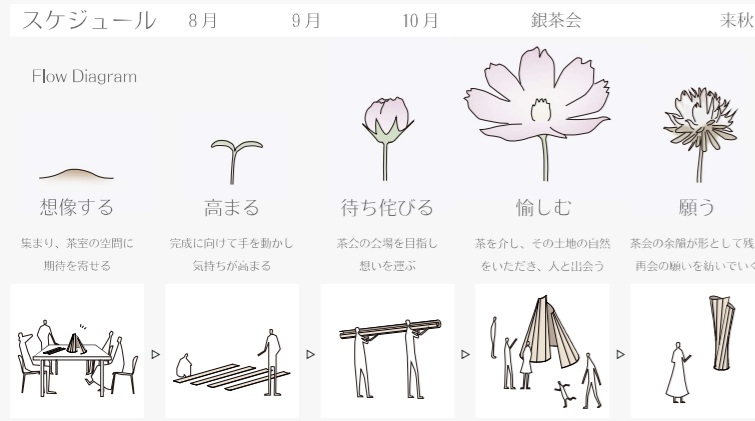
県産材の杉板



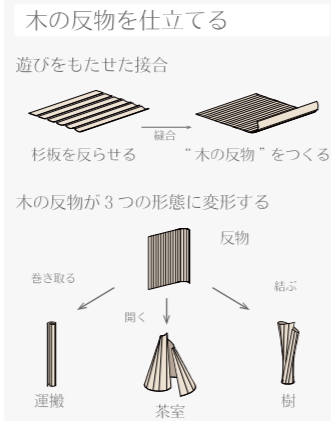
茶室を構成する木材は地域の材木店から購入した県産材の杉板を使用する。杉板は安価かつ軽量であり、長手方向には反りにくく、短手方向に反りやすいため、木提案の素材として扱いやすい。また薄くスライスする過程で飛んでしまう節も光を取り込む要素として捉えなおし、利用する。

□想定材料費：杉板 (4000×155) 1枚：740円 → 60枚：44,400円

03 PROCESS 秋を待つ茶室



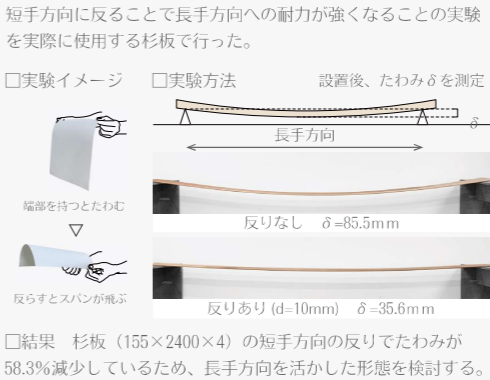
04 VARIATION 変形



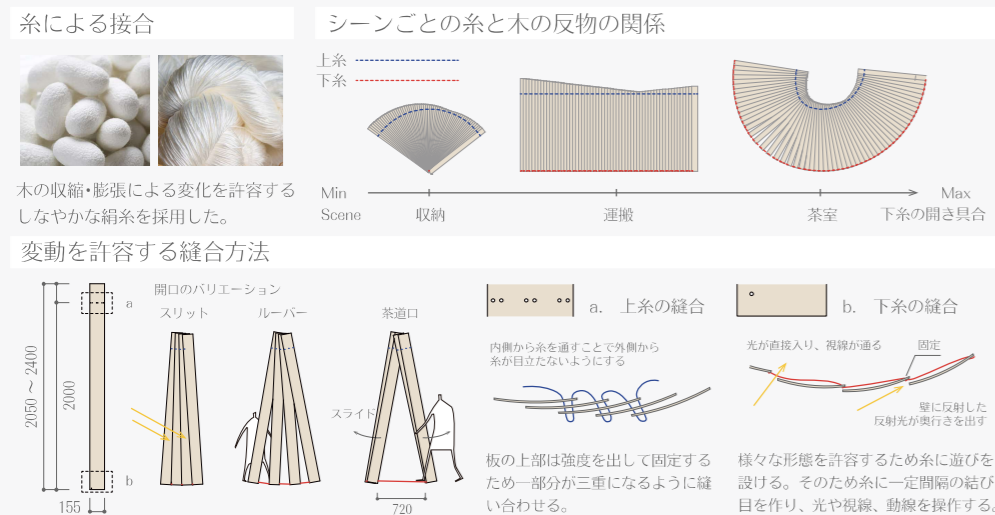
05 STUDY 反り実験



反りによるたわみの軽減



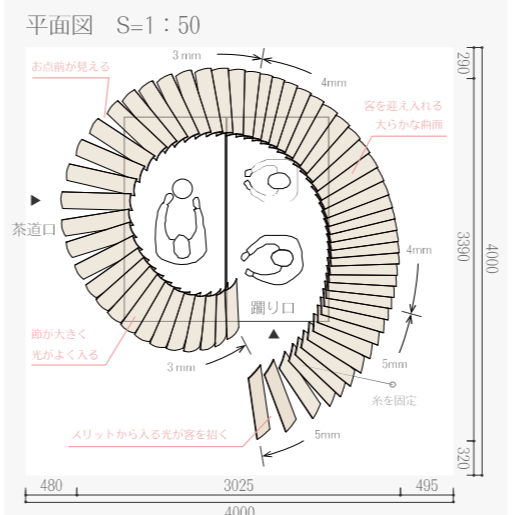
06 DETAIL 施工計画



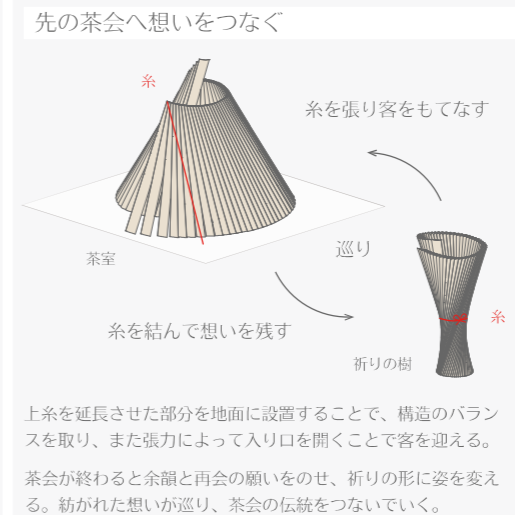
07 TRANSPORT 運搬性



08 PLAN 平面計画



09 CYCLE 巡る



ほううんあん 縫雲庵

うるこ雲が漂う季節、紅葉を手に取りふと空に透かすと、細胞をつなぐ葉脈がぼつりと漂う雲をつないでいくように美しく青空へ広がっていく。ぼつりと暮らす現代の人々が、再会することを見守るような、茶室空間を提案する。



内部の様子。半透明の境界がモノの輪郭をぼかし、淡い情景を作り出す。



日没後の様子。内部から漏れる明かりは様々な大きさの隙間を通して少しずつ異なる変化を見せる。

茶室内部から空を見上げる。広大に広がる秋の空を漂ううるこ雲と抜けのある一体となった空間は見る者を包み込む。

コンセプト

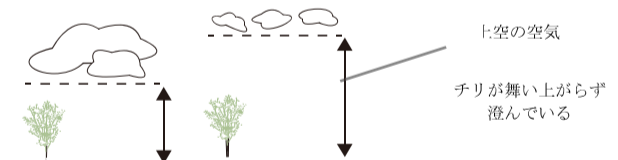
秋の空にぼつりと浮かぶうるこ雲を現代人にみため、人々の出会いを後押しするような空間を提案する。



空に透ける紅葉の葉脈
細胞を繋ぎ養分を送る
葉脈が空に伸びうるこ雲を繋ぐ

高く見える秋の空

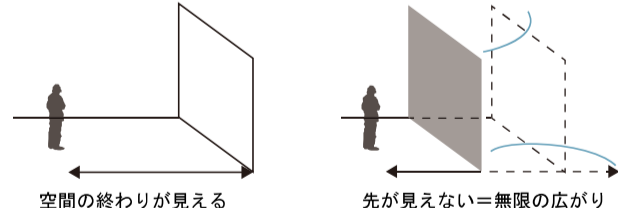
秋の雲は高い位置にできる。日射が少ないことから対流が起きにくく、チリが少ないことも相まって、秋の空は高く広大に感じられる。



上空の空気
チリが舞い上がり澄んでいる

半透明が作り出す無限の空間

見えそうで見えない半透明の境界は見る者の想像力を掻き立て、小さな空間の先に無限の広がりを作り出す。



プラダンが情景を抽象化する

茶室を構成する素材としてプラダンを使用する。梱包材や模型材料に用いられるプラダンは情緒的な魅力を秘めている。



プラダン
人やモノの輪郭をぼかし、淡い情景を映し出す

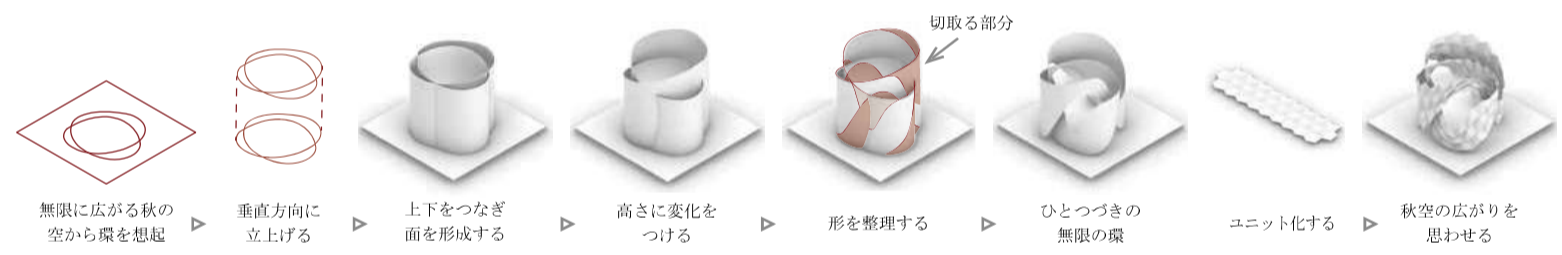
移ろいゆく瞬間の美しさ

プラダンは消耗品である。本来の役目を終え、捨てられる前に新たな意味を授かったプラダンは、儚く美しい空間を作り出す。



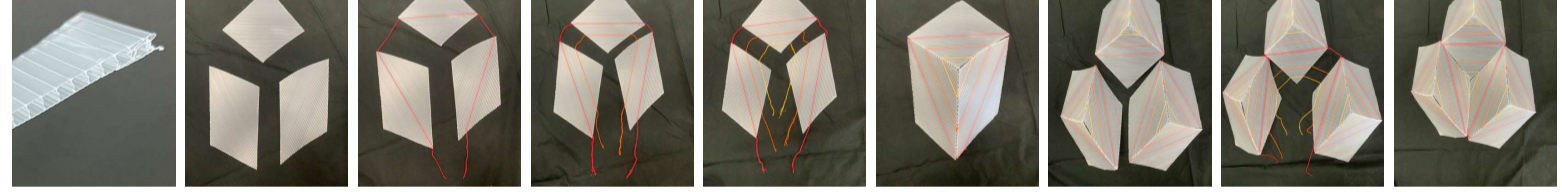
プラダン 利用の流れ

形の構想



無限に広がる秋の空から環を想起
垂直方向に立上げる
上下をつなぎ面を形成する
高さに変化をつける
形を整理する
ひとつづきの無限の環
ユニット化する
秋空の広がりを思わせる

ユニットの構成



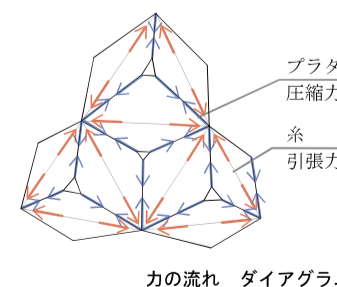
1 プラダンの中空構造
2 ひとつひとつ異なる形に切り出す。
3 中空部分を利用し、プラダンの対角線(赤色)を基本として3つのパーツを3本の糸で縫っていく。
4 糸を結びと形が固定される。
5 3つが1つに合わさったパーツも糸でつながり、凹凸のある面が構成するユニットができる。

全体の構成

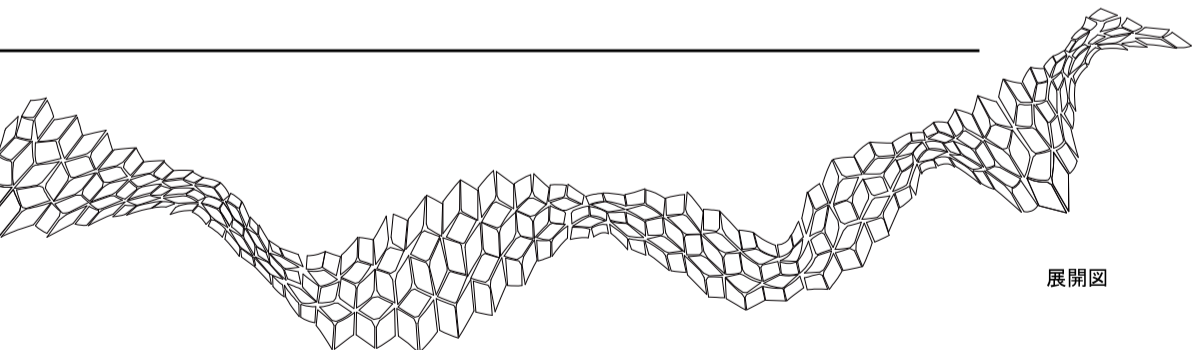
色とりどりの葉の葉脈が淡く透けるうるこ雲を繋いでいくように糸とプラダンを使ってユニットを組み上げる。

ユニットの構成と力の流れ

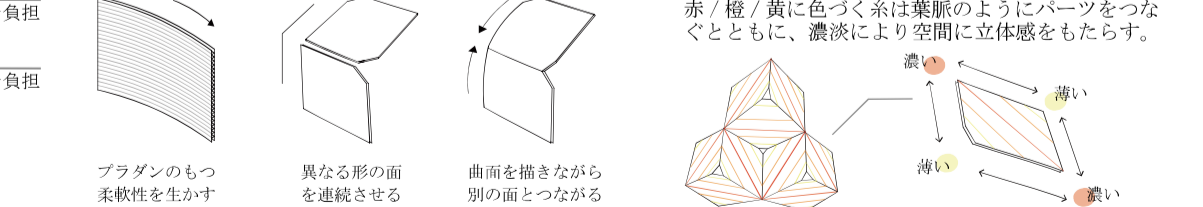
プラダンを糸でつなぎユニットを構成することで、面にかかる負担を最小限にする。



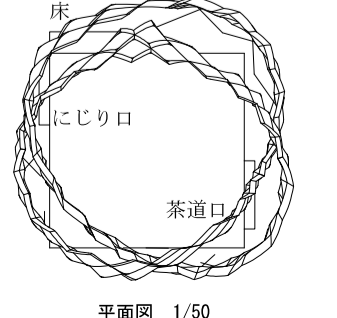
力の流れ ダイアグラム



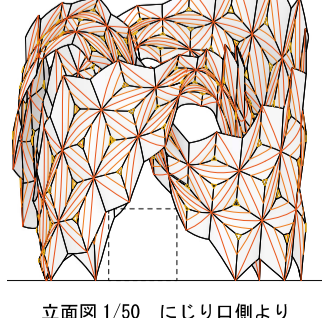
展開図



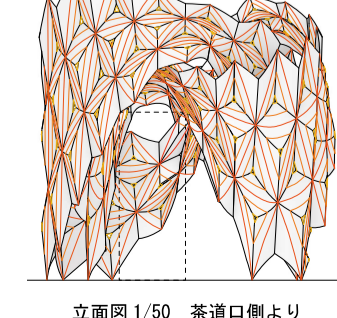
素材の性質を生かした造形
色とりどりの糸
赤 / 橙 / 黄に色づく糸は葉脈のようにパーツをつなぐとともに、濃淡により空間に立体感をもたらす。



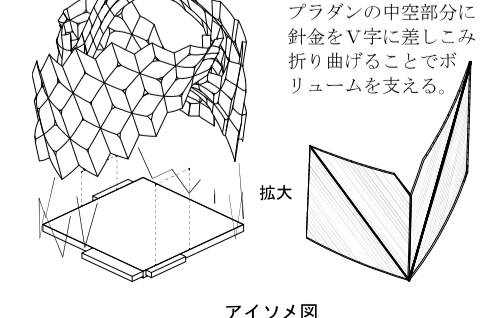
平面図 1/50



立面図 1/50 にじり口側より

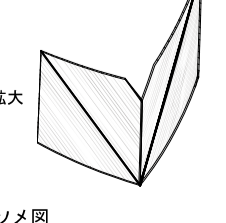


立面図 1/50 茶道口側より



アイソメ図

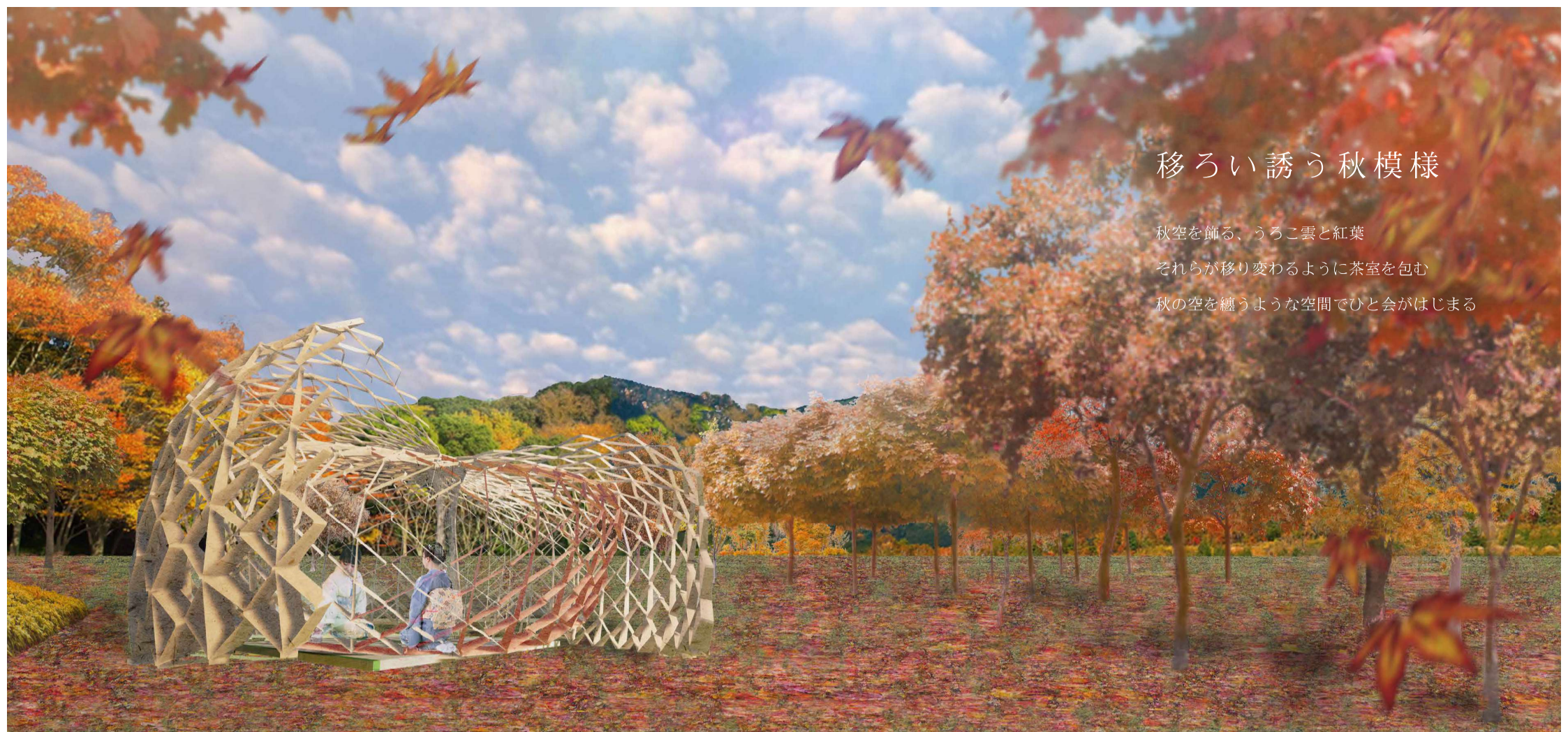
基礎・ディテール
プラダンの中空部分に針金をV字に差しこみ折り曲げることでボリュームを支える。



拡大

移ろい誘う秋模様

秋空を飾る、うろこ雲と紅葉
 それらが移り変わるように茶室を包む
 秋の空を纏うような空間でひと会いはじまる



01_コンセプト - 秋の空と紅葉が移りゆく空間 -



秋の空に浮かぶうろこ雲、そして映える紅葉。それぞれが重なり合いながら、秋の空の風景を形作る。日本では古くから物事を秋空と例えたり、紅葉を愛でる習慣があり、そこには移ろいゆくものに対する感性が読み取れ、儚さに美しさを見出した茶の世界とも繋がる。そこでうろこ雲と紅葉が移り変わっていくような空間はできないかと考えた。見る角度によってはうろこ雲になり、見る角度によっては紅葉となるような、移ろいのある空間を目指した。

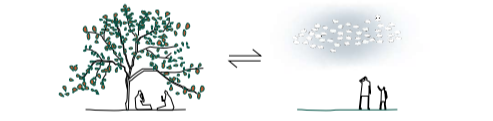
02_素材コンセプト - 突板と再生紙 持続可能な材料の新たな出会い -



突板は天然木を薄くスライスするため、希少な木を無駄なく使うことができる。より多くの製品が製作できるため、環境負荷低減につながり、比較的安く木材を利用できる。さらに今回は国産の広葉樹を選定することで、育成し大切に利用する必要がある国産広葉樹の新たな利用方法を提案することを意図した。また突板の構造的補助素材として、再生紙の和紙を利用することで資源の有効活用を行う。そして構造的に突板には、しなやかさと強度があるため、和紙を組み合わせることで部材を構成し、それだけで自立した構造が可能と考えた。繊細な材料から生まれる、しなやかな曲面をもつ茶席空間とのひと会を目指した。

03_形態決定

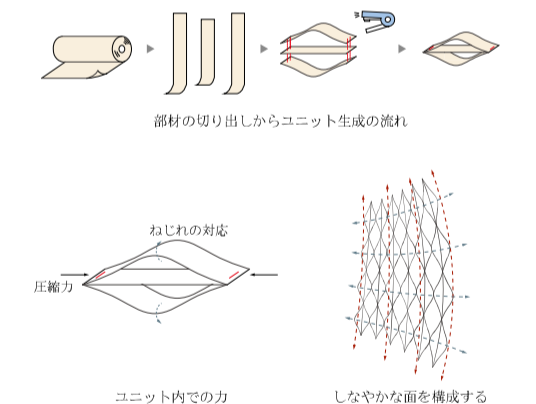
全体
 紅葉に包まれる木陰空間とうろこ雲の秋空を空間モチーフとし、小さなものが集まり包みこむような茶席の空間をつくる。視線や人の動きによって見え方が変わる茶席は移ろいやすい秋空を表す。



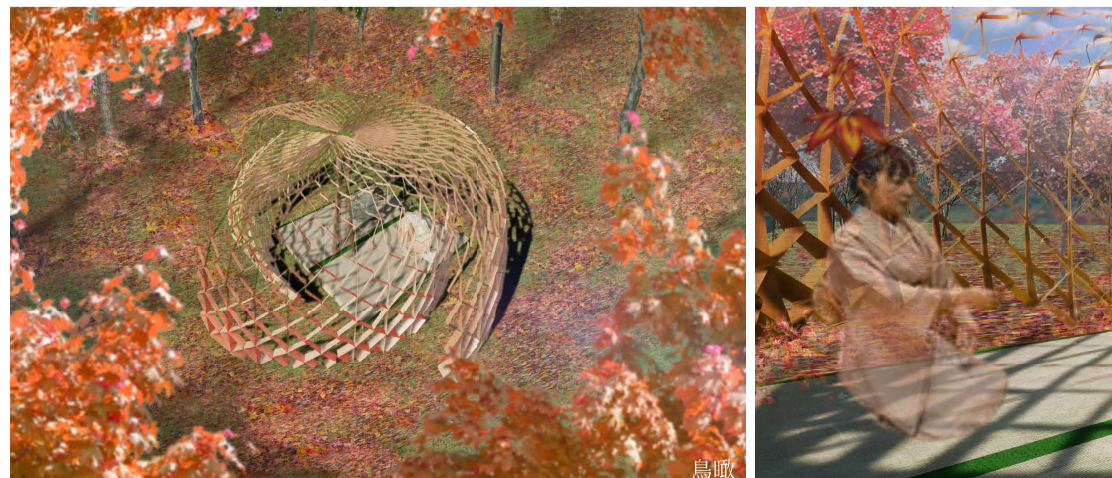
材料
 突板のみ：曲げにより折れ曲がる
 突板の裏に和紙：曲げの後元に戻る

突板のみだとある一定のところまで曲げると、折り曲げ部が割れ、座屈が生じてしまう。一方、裏側により粘りのある和紙を張った突板は靱性が高くなり、曲げに対する割れを防ぐことができる。また意匠的には、見る方向により見え方を楽しむことができる。

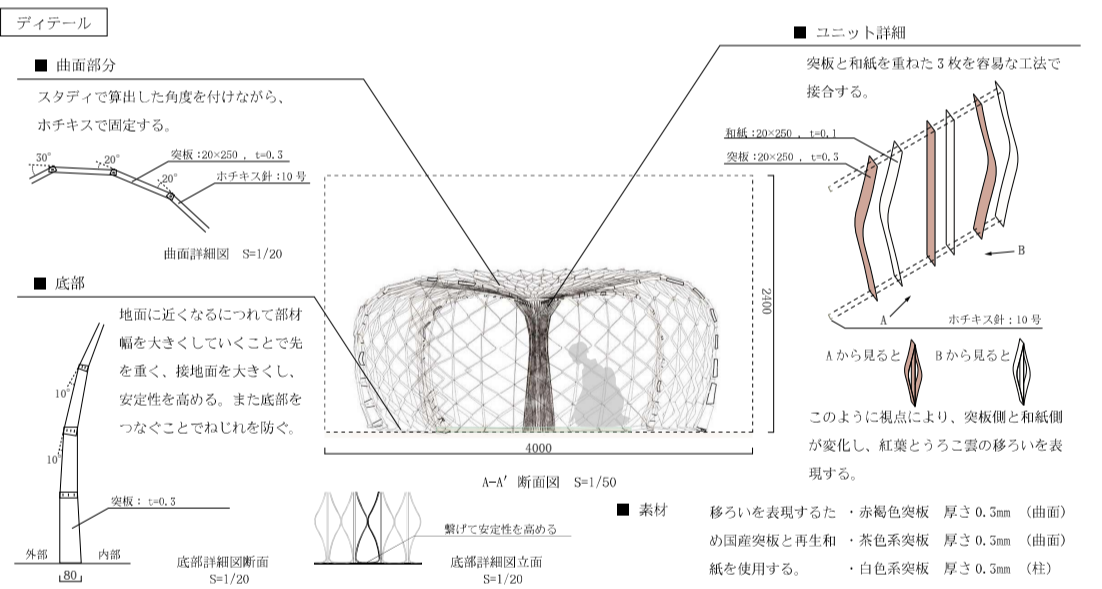
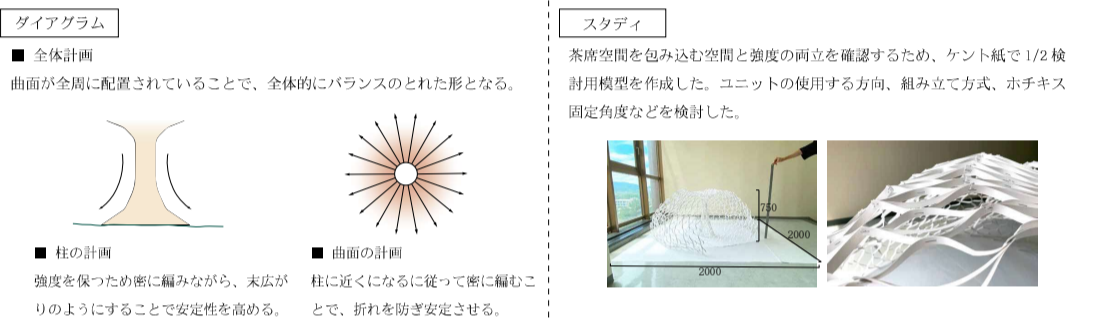
ユニット
 紙状の物質である突板を最大限活用するためのユニットを形成する。3枚を重ねて留めることで長さを固定し、両側の二枚によって圧縮やねじりに対応する。このように作られた単位形状を縦横につなげていくことで、しなやかな面の要素を構成する。



04_施工計画 - ホチキスとユニットによる容易な工法 -



05_構造計画



06_平面計画

動線に従って、見えるユニットの素材配置を行うことで、移ろう空間のコントロールを行う。和紙の面が見える位置に立つと、うろこ雲がイメージされた空間となり、また突板が見える位置に立つと紅葉に包まれたような空間となる。

